

第13回
日本腰痛学会

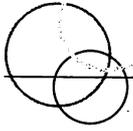
The 13th Annual Meeting of the Japanese Society of Lumbar Spine Disorders

プログラム・抄録集

2005年11月19日(土)

シェーンバッハ・サボー(砂防会館別館)

会長 菊地 臣一 (福島県立医科大学医学部整形外科学講座 教授)



第13回日本腰痛学会の開催にあたって

会長 菊地 臣一

(福島県立医科大学医学部整形外科講座)

第13回日本腰痛学会開催にあたり会長として一言、御挨拶を申し上げます。

過去10年、腰痛の診断や治療に関して、数多くの報告が世界中でなされてきています。腰痛は、最も集中的に研究されている領域の1つと言っても過言ではありません。しかし、活発な研究活動にも関わらず、新たな疾患概念の確立や大幅な治療成績の改善が得られる治療法の開発といった画期的な進歩は、残念ながら認められないというのが現実です。

そのような現状を踏まえて、現在、海外では数多くの提言がなされています。我々は、今、腰痛に対する概念が大幅に変わりつつある世界的な潮流のなかにいます。本学会は、このような時代を背景にして開催されると私自身は認識しています。そこで本学会では、腰痛の患者の大多数を占め、尚且つ抜本的な解決策が今尚確立されていない「非特異的腰痛」を中心に、第一線の診療現場で行われている様々な治療法について、その手技と治療成績を各領域での第一人者の先生方に発表して頂くシンポジウムを企画しました。そのなかには、海外では盛んに行われていて、我が国では余り行われていない治療法も含まれています。我々は、腰痛治療の様々な手技に対して、腰痛の治療を行ううえで、自分で取り入れる取り入れないは別にして、理解して、少なくとも患者に対して助言や指導出来る能力を備えておく必要があります。

もう1つのシンポジウムは、最近増加している骨粗鬆症に伴う椎体圧迫骨折に対する手術の進歩です。新しい術式の開発が、患者にとって真に利点があるのか、そして実際、患者のQOLは改善しているのかどうかを、第一線で活躍している先生方にそれぞれの術式とその成績や課題を報告してもらいます。

最後に、腰痛治療の大きな柱の1つになっている理学療法士の先生方に、「PTからみた腰痛の治療」のシンポジウムで、腰痛治療に対する取り組みを提示してもらいます。医師と理学療法士が相互に忌憚のない意見の交換が出来ることを期待しています。

ランチョンセミナーは2つ用意しました。1つは、腰痛治療では避けて通れないうつ病の問題を取り上げました。もう1つは、診療の進歩には欠かせない基礎的研究を取り上げてみました。

本学会の目的は、腰痛治療に対する国民の信頼獲得と、我々の治療による患者のQOLの向上です。その為には、集学的・多面的アプローチは必然です。医師、理学療法士、そして腰痛に携わる全ての医療従事者が、同じ土俵の上に立って議論し、連携して我が国の腰痛診療の質的向上に邁進する必要があると私は考えます。本学会が、今後の我が国における腰痛診療の進歩に少しでも繋がることを期待しています。

2005年11月